

春は馬車に乗って

横光利一

青空文庫

海浜の松が^{こがらし}風^{こがらし}に鳴り始めた。庭の片隅^{かたすみ}で一^{ひとむら}叢^{むら}の小さなダリヤが縮んでいった。

彼は妻の寝ている寝台の傍^{そば}から、泉水の中の鈍い亀の姿を眺^{なが}めていた。亀が泳ぐと、水面から輝^てり返された明るい水影が、乾いた石の上で揺れていた。

「まあね、あなた、あの松の葉がこの頃それは綺麗^{きれい}に光るのよ」と妻は云った。

「お前は松の木を見ていたんだな」

「ええ」

「俺は亀を見てたんだ」

二人はまたそのまま黙り出そうとした。

「お前はそこで長い間寝ていて、お前の感想は、たった松の葉が美しく光ると云うことだけなのか」

「ええ、だって、あたし、もう何も考えないことにしているの」

「人間は何も考えないで寝ていられる筈はずがない」

「そりや考えることは考えるわ。あたし、早くよくなつて、シャツせんたくと井戸で洗濯せんたくがしたくつてならないの」

「洗濯がしたい？」

彼はこの意想外の妻の慾望に笑い出した。

「お前はおかしな奴だね。俺おれに長い間苦勞をかけておいて、洗濯がしたいとは変つた奴だ」

「でも、あんなに丈夫な時が羨ましいの。あなたは不幸な方だね」

「うむ」と彼は云った。

彼は妻を貰うまでの四五年に渡る彼女の家庭との長い争闘を考えた。それから妻と結婚してから、母と妻との間に挟まれた二年間の苦痛な時間を考えた。彼は母が死に、妻と二人になると、急に妻が胸の病気で寝て了ったこの一年間の艱難を思い出した。

「なるほど、俺ももう洗濯がしたくなかった」

「あたし、いま死んだつてもういいわ。だけでも、あたし、あなたにもつと恩を返してから死にたいの。この頃あたし、そればかり苦になって」

「俺に恩を返すつて、どんなことをするんだね」

「そりや、あたし、あなたを大切にして、……」

「それから」

「もつといろいろすることがあるわ」

——しかし、もうこの女は助からない、と彼は思った。

「俺はそう云うことは、どうだつていいんだ。ただ俺は、そうだね。俺は、ただ、ドイツのミュンヘンあたりへいっぺん行つて、

それも、雨の降っている所でなくちや行く気がしない」

「あたしも行きたい」と妻は云うと、急に寝台の上で腹を波のようにならせた。

「お前は絶対安静だ」

「いや、いや、あたし、歩きたい。起してよ、ね、ね」

「駄目だ」

「あたし、死んだっていいから」

「死んだって、始まらない」

「いいわよ、いいわよ」

「まあ、じつとしてるんだ。それから、一生の仕事に、松の葉がどんなに美しく光るかって云う形容詞を、たった一つ考え出すのだね」

妻は黙って了った。彼は妻の気持ちを転換させるために、柔らかな話題を選択しようとして立ち上った。

海では午後の波が遠く岩にあたって散っていた。一艘そうの舟が傾

きながら鋭い岬みさきの尖端せんたんを廻めぐっていった。渚なぎさでは逆巻さかまきく濃藍のうらんしょ色いろの背景はいけいの上うへで、子供こどもが二人湯氣ゆげの立たった芋いもを持もって紙屑かみくずのようように坐まっていた。

彼は自分に向むかって次つぎぎ次つぎぎに來る苦痛くつうの波なみを避よけようと思おもったことはまだなかつた。このそれぞれに質しつを違ちがえて襲おそつて來る苦痛くつうの波なみの原因げんいんは、自分の肉體にくたいの存在そんざいの最初さいしょに於おいて働いっていたように思おもわれたからである。彼は苦痛くつうを、譬たとえば砂糖さとうを甜なめる舌したのようように、あらゆる感かん覺かくの眼まなこを光あらせて吟味ぎんみしながら甜あまめ尽つしてやろうと決け心こした。そうして最後さいごに、どの味あじが美うま味あじかつたか。——俺おれの身体からだは一本いっぴんのフラスコだ。何なにものよりも、先まず透と明めいでなければならぬ。と彼は考かんえた。

ダリヤの茎が干枯ひからびた繩なわのように地の上でむすぼれ出した。潮風が水平線の上から終日吹きつけて来て冬になった。

彼は砂風の巻き上る中を、一日に二度ずつ妻の食べたがる新鮮な鳥の臍物を捜しに出かけて行つた。彼は海岸町の鳥屋という鳥屋を片端から訪ねていって、その黄色い俎まないたの上から一応庭の中を眺め廻してから訊きくのである。

「臍物はないか、臍物は」

彼は運め好く瑪瑙めのうのような臍物を氷の中から出されると、勇敢な足どりで家に帰つて妻の枕元に並べるのだ。

「この曲玉まがたまのようなのは鳩はとの腎臟じんぞうだ。この光沢のある肝臟は

これは家鴨あひるの生胆いきぎもだ。これはまるで、噛み切った一片くちびるの唇のよう
 うで、この小さな青い卵は、これは崑崙山こんろんざんの翡翠ひすいのようで「
 すると、彼の饒舌じょうぜつに煽動せんどうさせられた彼の妻は、最初の接せ
つぶん吻を迫るように、華はなやかに床の中で食欲みもだのために身悶みもだえした。
 彼は惨酷に臓物を奪い上げると、直ぐ鍋なべの中へ投げ込んで了うの
 が常であつた。

妻は檻おりのような寝台の格子こうしの中から、微笑しながら絶えず湧わき
 立つ鍋の中を眺めていた。

「お前をここから見てみると、実に不思議な獣けものだね」と彼は云つ
 た。

「まあ、獣だつて、あたし、これでも奥さんよ」

「うむ、臍物を食べたがっている檻の中の奥さんだ。お前は、いつの場合に於ても、どこか、ほのかに惨忍性を湛たえている」

「それはあなたよ。あなたは理智的で、惨忍性をもっていて、いつでも私の傍から離れたがろうとばかり考えていらしつて」

「それは、檻の中の理論である」

彼は彼の額に煙り出す片影のような皺しわさえも、敏感に見逃みのがさな

い妻の感覚を誤魔化すために、この頃いつもこの結論を用意していなければならなかった。それでも時には、妻の理論は急激に傾きながら、彼の急所を突き通して旋廻することが度々たびたびあった。

「実際、俺はお前の傍に坐っているのは、そりやいやだ。肺病と云うものは、決して幸福なものではないからだ」

彼はそう直接妻に向つて逆襲することがあつた。

「そうではないか。俺はお前から離れたとしても、この庭をぐるぐる廻っているだけだ。俺はいつでも、お前の寝ている寝台から綱をつけられていて、その綱のえが画く円周の中で廻っているより仕方がない。これは憐あわれな状態である以外の、何物でもないではないか」

「あなたは、あなたは、遊びたいからよ」と妻は口く惜やしそうに云つた。

「お前は遊びたかないのかね」

「あなたは、他の女の方と遊びたいのよ」

「しかし、そう云うことを云い出して、もし、そうだったらどう

するんだ」

そこで、妻が泣き出してうのが例であつた。彼は、はツとして、また逆に理論を極^{きわ}めて物柔らかかに解きほぐして行かねばならなかつた。

「なるほど、俺は、朝から晩まで、お前の枕元にいなければならぬと云うのはいやなのだ。それで俺は、一刻も早く、お前をよくくしてやるために、こうしてぐるぐる同じ庭の中を廻っているのではないか。これには俺とて一通りのことじやないさ」

「それはあなたのためだからよ。私のことを、一寸^{ちよつと}もよく思つてして下さいるんじゃないんだわ」

彼はここまで妻から肉迫されて来ると、当然彼女の檻の中の理

論にとりひしがれた。だが、果して、自分は自分のためにのみ、この苦痛を噛み殺しているのだろうか。

「それはそうだ、俺はお前の云うように、俺のために何事も忍耐しているのにちがいない。しかしだ、俺が俺のために忍耐していると云うことは、一体誰だれゆえ故にこんなことをしていなければ、ならないんだ。俺はお前さえいなければ、こんな馬鹿な動物園の真ま似ねはしていたくないんだ。そこをしていると云うのは、誰のためだ。お前以外の俺のためだとも云うのか。馬鹿馬鹿しい」

こう云う夜になると、妻の熱は定きまつて九度近くまで昇り出した。彼は一本の理論を鮮明にしたために、氷ひょうのう囊ふくろの口を、開けたり閉めたり、夜通ししなければならなかった。

しかし、なお彼は自分の休息する理由の説明を明瞭めいりょうにするために、この懲りるべき理由の整理を、殆どほとん日日し続けなければならなかった。彼は食うためと、病人を養うためとに別室で仕事をした。すると、彼女は、また檻の中の理論を持ち出して彼を攻めたてて来るのである。

「あなたは、私の傍をどうしてそう離れたいんでしょう。今日はたった三度よりこの部屋へ来て下さらないんですもの。分つていてよ。あなたは、そう云う人なんですもの」

「お前と云う奴は、俺がどうすればいいと云うんだ。俺は、お前の病気をよくするために、薬と食物とを買わなければならぬだ。誰がじつとしていて金をくれる奴があるものか。お前は俺に

手品でも使えと云うんだね」

「だって、仕事なら、ここでも出来るでしょう」と妻は云った。

「いや、ここでは出来ない。俺はほんの少しでも、お前のことを忘れているときでなければ出来ないんだ」

「そりやそうですわ。あなたは、二十四時間仕事のことより何も考えない人なんですもの、あたしなんか、どうだっていいんですわ」

「お前の敵は俺の仕事だ。しかし、お前の敵は、実は絶えずお前を助けているんだよ」

「あたし、淋さびしいの」

「いずれ、誰だって淋しいにちがいない」

「あなたはいいわ。仕事があるんですもの。あたしは何もないんだわ」

「捜せばいいじゃないか」

「あたしは、あなた以外に捜せないんです。あたしは、じっと天井を見て寝てばかりいるんです」

「もう、そこらでやめてくれ。どちらも淋しいとしておこう。俺には締切りがある。今日書き上げないと、向うがどんなに困るかしれないんだ」

「どうせ、あなたはそうよ。あたしより、締切りの方が大切なんですから」

「いや、締切りと云うことは、相手のいかなる事情をも退けると

云う張り札なんだ。俺はこの張り札を見て引き受けて了った以上、自分の事情なんか考えてはられない」

「そうよ、あなたはそれほど理智的なものよ。いつでもそうなの、あたし、そう云う理智的な人は、大だいきら嫌い」

「お前は俺の家の者である以上、他から来た張り札に対しては、俺と同じ責任を持たなければならないんだ」

「そんなもの、引き受けなければいいじゃありませんか」

「しかし、俺とお前の生活はどうなるんだ」

「あたし、あなたがそんなに冷淡になる位なら、死んだ方がいいの」

すると、彼は黙って庭へ飛び降りて深呼吸をした。それから、

彼はまた風呂敷ふろしきを持って、その日の臍物へらものを買いにこつそりと町の中へ出かけていった。

しかし、この彼女の「檻の中の理論」は、その檻かごに繋がれて廻まわっている彼の理論を、絶えず全身的な興奮をもつて、殆ど間髪かんはつの隙間すきまをさえも洩もらさずに追つ駈かけて来るのである。このため彼女は、彼女の檻の中で製造する病的な理論の鋭利さのために、自身の肺の組織を日加加速度的に破壊していった。

彼女の曾かっての円く張った滑なめらかな足と手は、竹のように瘦やせて来た。胸たたは叩けば、軽い張子たばこのような音を立てた。そうして、彼女は彼女の好きな鳥の臍物へらものさえも、もう振り向きもしなくなった。

彼は彼女の食欲をすすめるために、海からとれた新鮮な魚の数

々を縁側に並べて説明した。

「これは鮫鱈あんこで踊り疲れた海のピエロ。これは海老えびで車海老、海

老は甲かつちゆう胃をつけて倒れた海の武者。この鱒あじは暴風で吹きあげ

られた木の葉である」

「あたし、それより聖書を読んでほしい」と彼女は云った。

彼はポウロのように魚を持ったまま、不吉な予感に打たれて妻の顔を見た。

「あたし、もう何も食べたかないの、あたし、一日に一度ずつ聖書を読んで貰いたいの」

そこで、彼は仕方なくその日から汚れたよごバイブルを取り出して読むことにした。

「エホバよわが祈りをききたまえ。願くばわが号呼さけびの声の御前に
いたらんことを。わが窮苦なやみの日、み顔を蔽おほいたもうなかれ。なん
じの耳をわれに傾け、我が呼ぶ日にすみやかに我にこたえたまえ。
わがもろもろの日は煙のごとく消え、わが骨は焚木たきぎのごとく焚やる
るなり。わが心は草のごとく撃うたれてしおれたり。われ糧かてをくらう
を忘れしによる」

しかし、不吉なことはまた続いた。或る日、暴風の夜が開けた
翌日、庭の池の中からあの鈍い亀が逃げて了つていた。

彼は妻の病勢がすすむにつれて、彼女の寝台の傍からますます
離れることが出来なくなつた。彼女の口から、痰たんが一分毎に出始
めた。彼女は自分でそれをとることが出来ない以上、彼がとつて

やるよりとるものがなかった。また彼女は激しい腹痛を訴え出した。咳せきの大きな発作が、昼夜を分わかたず五回ほど突発した。その度に、彼女は自分の胸を引つ掻かき廻して苦しんだ。彼は病人とは反対に落ちつかなければならぬと考えた。しかし、彼女は、彼が冷静になればなるほど、その苦悶の最中に咳を続けながら彼のを罵のつた。

「人の苦しんでいるときに、あなたは、あなたは、他ほかのことを考えて」

「まあ、静まれ、いま吠ど鳴なつちや」

「あなたが、落ちついていいるから、憎らしいのよ」

「俺が、今狼あ狽わてては」

「やかましい」

彼女は彼の持つている紙をひったくると、自分の啖を横なぐりに拭き^ふとつて彼に投げつけた。

彼は片手で彼女の全身から流れ出す汗を所を扱^{えら}ばず拭きながら、片手で彼女の口から咳出す啖を絶えず拭きとつていなければならなかつた。彼の蹲^{しゃが}んだ腰はしびれて来た。彼女は苦しまぎれに、天井を睨^{にら}んだまま、両手を振つて彼の胸を叩き出した。汗を拭きとる彼のタオルが、彼女の寝巻にひっかかった。すると、彼女は、蒲団^{ふとん}を蹴^けりつけ、身体をばたばた波打たせて起き上ろうとした。

「駄目だ、駄目だ、動いちや」

「苦しい、苦しい」

「落ちつけ」

「苦しい」

「やられるぞ」

「うるさい」

彼は楯たてのように打たれながら、彼女のざらざらした胸を撫なで擦さすつた。

しかし、彼はこの苦痛な頂天に於てさえ、妻の健康な時に彼女から与えられた自分の嫉妬しつとの苦しみよりも、寧ろ数段の柔かさがあると思った。してみると彼は、妻の健康の肉体よりも、この腐った肺臓を持ち出した彼女の病体の方が、自分にとってはより幸福を与えられていると云うことに気がついた。

——これは新鮮だ。俺はもうこの新鮮な解釈によりすがつてい
るより仕方がない。

彼はこの解釈を思い出す度に、海を眺めながら、突然あはあは
と大きな声で笑い出した。

すると、妻はまた、檻の中の理論を引き摺り出して苦々しそう
に彼を見た。

「いいわ、あたし、あなたが何ぜ笑ったのかちやんと知ってるん
ですもの」

「いや、俺はお前がよくなって、洋装をきたがって、ぴんぴんは
しやがれるよりは、静に寝ていられる方がどんなに有難いかしれ
ないんだ。第一、お前はそうしていると、蒼あおざめていて、気品が

ある。まア、ゆっくり寝ていてくれ」

「あなたは、そう云う人なんだから」

「そう云う人なればこそ、有難がつて看病が出来るのだ」

「看病看病つて、あなたは二言目には看病を持ち出すのね」

「これは俺の誇りだよ」

「あたし、こんな看病なら、して欲しくないの」

「ところが、俺が譬^{たと}えば三分間向うの部屋へ行つていたとする。

すると、お前は三日も抛^ほつたらかされたように云うではないか、

さア、何とか返答してくれ」

「あたしは、何も文句を云わずに、看病がして貰いたいの。いやな顔をされたり、うるさがられたりして看病されたつて、ちつと

も有難いと思わないわ」

「しかし、看病と云うのは、本来うるさい性質のものとして出来上っているんだぜ」

「そりや分っているわ。そこをあたし、黙ってして貰いたいの」
「そうだ、まあ、お前の看病をするためには、一族郎党を引きつれて来ておいて、金を百万円ほど積みあげて、それから、博士を十人ほどと、看護婦を百人ほどと」

「あたしは、そんなことなんかして貰いたかないの、あたし、あなた一人にして貰いたいの」

「つまり、俺が一人で、十人の博士の真似と、百人の看護婦と、百万円の頭取の真似をしろって云うんだね」

「あたし、そんなことなんか云ってやしない。あたし、あなたにじつと傍にいて貰えば安心出来るの」

「そら見ろ、だから、少々は俺の顔が顰ゆがんだり、文句を云つたりする位は我慢しろ」

「あたし、死んだら、あなたを怨うらんで怨んで怨んで、そして死ぬの」

「それ位のことなら、平気だね」

妻は黙って了った。しかし、妻はまだ何か彼に斬きりつけたくてもならないように、黙って必死に頭を研とぎ澄としているのを彼は感じた。

しかし彼は、彼女の病勢を進まず彼自身の仕事と生活のことを

考えねばならなかった、だが、彼は妻の看病と睡眠の不足から、だんだんと疲れて来た。彼は疲れれば疲れるほど、彼の仕事が出来なくなるのは分っていた。彼の仕事が出来なければ出来ないほど、彼の生活が困り出すのも定きまっていた。それにも拘かからず、昂こうし進んして来る病人の費用は、彼の生活の困り出すのに比例して増して来るのは明あきかなことであつた。然しかも、なお、いかなることがあろうとも、彼がますます疲労して行くことだけは事実である。

——それなら俺は、どうすれば良いのか。

——もうここらで俺もやられたい。そうしたら、俺は、なに不足なく死んでみせる。

彼はそう思うことも時々あつた。しかし、また彼は、この生活

の難局をいかにして切り抜けるか、その自分の手腕を一度はつきり見たくもあつた。彼は夜中起されて妻の痛む腹を擦りながら、

「なお、憂きことの積れかし、なお憂きことの積れかし」

と呟くのが癖になつた。ふと彼はそう云う時、茫々とした青

い羅紗の上を、撞かれた球がひとり飄々として転がって行く

のが目に浮んだ。

——あれは俺の玉だ、しかし、あの俺の玉を、誰がこんなに出で
たらめ 鱈目に突いたのか。

「あなた、もつと、強く擦つてよ、あなたは、どうしてそう面倒臭がりになつたのでしよう。もとはそうじゃなかつたわ。もつと親切に、あたしのお腹なかを擦つて下さつたわ。それなのに、この頃

は、ああ痛、ああ痛」と彼女は云った。

「俺もだんだん疲れて来た。もう直ぐ、俺も参るだろう。そうしたら、二人がここで呑のん気に寝転んでいようじゃないか」

すると、彼女は急に静になって、床の下から鳴き出した虫のよ
うな憐れな声で呟いた。

「あたし、もうあなたにさんざ我ままを云ったわね。もうあたし、
これでいつ死んだっていいわ。あたし満足よ。あなた、もう寝て
頂戴な。あたし我慢をしているから」

彼はそう云われると、不覚にも涙が出て来て、撫なでてる腹の手
を休める気がしなくなった。

庭の芝生が冬の潮風に枯れて来た。硝子戸ガラスどは終日辻馬車つじばしゃの扉とびらのようにがたがたと慄ふるえていた。もう彼は家の前に、大きな海のひかえているのを長い間忘れていた。

或る日彼は医者いしやの所へ妻の薬を貰いに行つた。

「そうそう。もつと前からあなたに云おう云おうと思つていたんですが」

と医者いしやは云つた。

「あなたの奥さんは、もう駄目ですよ」

「はア」

彼は自分の顔がだんだん蒼ざめて行くのをはつきりと感じた。

「もう左の肺がありませんし、それに右も、もう余程進んでおり

ます」

彼は海浜に添って、車に揺られながら荷物のように帰って来た。晴れ渡った明るい海が、彼の顔の前で死をかくまっている単調な幕のように、だらりとしていた。彼はもうこのまま、いつまでも妻を見たくないと思った。もし見なければ、いつまでも妻が生きているのを感じていられるにちがいないのだ。

彼は帰ると直ぐ自分の部屋へ這入^{はい}った。そこで彼は、どうすれば妻の顔を見なくて済まされるかを考えた。彼はそれから庭へ出ると芝生の上へ寝転んだ。身体が重くぐったりと疲れていた。涙が力なく流れて来ると彼は枯れた芝生の葉を丹念にむしっていた。

「死とは何だ」

ただ見えなくなるだけだ、と彼は思った。暫くして、彼は乱れた心を整えて妻の病室へ這入っていった。

妻は黙って彼の顔を見詰めていた。

「何か冬の花でもいらぬか」

「あなた、泣いていたのね」と妻は云った。

「いや」

「そうよ」

「泣く理由がないじゃないか」

「もう分つていてよ。お医者さんが何か云つたの」

妻はそうひとり定めてかかると、別に悲しそうな顔もせず黙つて天井を眺め出した。彼は妻の枕元の籐椅子とういすに腰を下ろすと、

彼女の顔を更あらためて見覚えて置くようにじつと見た。

——もう直すぐ、二人の間の扉は閉められるのだ。

——しかし、彼女も俺も、もうどちらもお互に与えるものは与えてしまった。今は残っているものは何物もない。

その日から、彼は彼女の云うままに機械のように動き出した。そうして、彼は、それが彼女に与える最後の餞せんべつ別だと思つていた。

或る日、妻はひどく苦しんだ後で彼に云った。

「ね、あなた、今度モルヒネを買って来てよ」

「どうするんだね」

「あかし、飲むの、モルヒネを飲むと、もう眼が覚めずにこのま

まずつと眠つて了うんですつて」

「つまり、死ぬことかい？」

「ええ、あたし、死ぬことなんか一寸も恐こわかないわ。もう死んだら、どんなにいいかしれないわ」

「お前も、いつの間にか豪えらくなつたものだね。そこまで行けば、もう人間もいつ死んだつて大丈夫だ」

「でも、あたしね、あなたに濟まないとと思うのよ。あなたを苦しめてばかりいたんですもの。御免なさいな」

「うむ」と彼は云つた。

「あたし、あなたのお心はそりやよく分つているの。だけど、あたし、こんなに我ままを云つたのも、あたしが云うんじゃないわ。」

病氣が云わすんだから」

「そうだ。病氣だ」

「あたしね、もう遺言も何も書いてあるの。だけど、今は見せな
いわ。あたしの床の下にあるから、死んだら見て頂戴ちようだい」

彼は黙つて了つた。——事實は悲しむべきことなのだ。それに、
まだ悲しむべきことを云うのは、やめて貰いたいと彼は思った。

花壇の石の傍で、ダリヤの球根が掘り出されたまま霜に腐つて
いった。亀に代つてどこからか来た野の猫が、彼の空いた書齋あの
中をのびやかに歩き出した。妻は殆ど終日苦しきのために何も云
わずに黙つていた。彼女は絶えず、水平線を狙ねらつて海面に突出し

ている遠くの光った岬ばかりを眺めていた。

彼は妻の傍で、彼女に課せられた聖書を時々読み上げた。

「エホバよ、願くば忿^{いきどおり} 恚^いをもて我をせめ、烈^{はげ}しき怒りをもて懲^こらしめたもうなかれ。エホバよ、われを憐^{あわ}れみたまえ、われ萎^{しぼ}み衰^しうなり。エホバよわれを医^いしたまえ、わが骨^{ほね}わななき震^{ふる}う。わが靈^{たましい}魂^いさえも甚^{いた}くふるいわなく。エホバよ、かくて幾その時をへたもうや。死にありては汝^{なんじ}を思^いい出^いずることもなし」

彼は妻の啜^{すす}り泣くのを聞いた。彼は聖書を読むのをやめて妻を見た。

「お前は、今何を考えていたんだね」

「あたしの骨はどこへ行くんでしょう。あたし、それが気になる

の」

——彼女の心は、今、自分の骨を気にしている。——彼は答えることが出来なかつた。

——もう駄目だ。

彼は頭を垂れるように心を垂れた。すると、妻の眼から涙が一層激しく流れて来た。

「どうしたんだ」

「あたしの骨の行き場がないんだわ。あたし、どうすればいいんですでしょう」

彼は答えの代りにまた聖書を急いで読み上げた。

「神よ、願くば我を救い給え。大水ながれ来りて我たましいにまきた

で及べり。われ立止たちとなき深き泥の中に沈めり。われ深ふかみず水におちいる。お水わが上を溢あふれ過ぐ。われ歎きによりて疲れたり。わが喉のどはかわき、わが目はわが神を待ちわびて衰えぬ」

彼と妻とは、もう萎しおれた一對の莖のように、日日黙つて並んでいた。しかし、今は、二人は完全に死の準備をして了つた。もう何事が起ろうとも恐がるものはなくなつた。そうして、彼の暗く落ちついた家の中では、山から運ばれて来る水みずがめ甕の水が、いつも静まつた心のように清らかに満ちていた。

彼の妻の眠っている朝は、朝毎に、彼は海面から頭を擡もたげる新しい陸地の上を素足で歩いた。前夜満潮に打ち上げられた海草は

冷たく彼の足にからまりついた。時には、風に吹かれたようにさ迷い出て来た海辺の童児が、生々しい緑の海苔のりにすべりながら岩角をよじ登っていた。

海面にはだんだん白帆が増していった。海際うみぎわの白い道が日増しに賑にぎやかになって来た。或る日、彼の所へ、知人から思わぬスイトピーの花束が岬を廻って届けられた。

長らく寒風にさびれ続けた家の中に、初めて早春が匂におやかに訪れて来たのである。

彼は花粉にまみれた手で花束を捧たげるように持ちながら、妻の部屋へ這入っていった。

「とうとう、春がやって来た」

「まあ、綺麗きれいだわね」と妻は云うと、頬ほほ笑みながら瘦やせ衰えた手を花の方へ差し出した。

「これは実に綺麗じゃないか」

「どこから来たの」

「この花は馬車に乗って、海の岸を真っ先きに春を撒まき撒きやつて来たのさ」

妻は彼から花束を受けると両手で胸いっぱい抱きしめた。そうして、彼女はあの明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍こ惚うとして眼を閉じた。

青空文庫情報

底本：「機械・春は馬車に乗って」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年8月20日発行

1995（平成7）年4月10日34刷

入力：MAMI

校正：もりみつじゅんじ

2000年9月1日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

春は馬車に乗って

横光利一

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>